



















本展への参加を打診された時、福元さんから送られてきた企画書の一節に心を惹かれた。「重要なのは——どっちつかずな状態に居心地悪くともどまり続けることではないか。」この言葉が、日頃制作の中で感じている自分自身への問いかけを言い当てているように思えたからだ。

いくつかの例外はあるが、私は主に火を用いて作品制作をおこなっている。紙、木材、鉄、プラスチックなど、シリーズ毎に素材を変え、それらを積層したり繋ぎ合わせたりした支持体を燃やし、焼失・変形・変質した素材の質感を取り入れながら作品と呼べるものを生み出している。

火を使い始めたきっかけは、広島市の平和記念館で見た人影が焼き付いたとされる石段だ。わずかな痕跡が出来事の悲惨さを物語っていた。人は、残された影からでも想像力を働かせることができるのだと、そして、火が内包する途方もない暴力性に衝撃を受けたのを覚えている。しかし、「平和の灯」として平和記念館に向かい合う広場で人々の祈りを受け止めているシンボルも、また火であった。

人は、火を様々なに活用し、同時に想いも託してきた。それは、生活を支える文明の原動力であり、畏怖と信仰を受け止める神性の象徴でもあり、時には相手だけでなく自分自身すら焼き尽くす暴力の道具にもなる。歴史を遡ってみると、火を扱う人の知恵の豊潤さに驚かされる。では、それほどに多様な火の特性を作品化するにはどうすれば良いか、それが私の制作の根底にあるテーマである。

上述したように、本展で展示した作品の内、絵画作品である〈transitional stroke〉以外は制作の過程で火を用いている。〈trans〉は何十枚も貼り重ねた画用紙を直接バーナーで燃やして捲れ上がった灰をそのままの状態提示し、〈transtructure〉では組み合わせた木材を燃やし、焼失した部分に新しい木材を継ぎ足してさらに燃やすことを繰り返している。〈meltrans-melt〉は木材をビニール袋に変え、熱による収縮を活かして溶けたビニールを積層させた立体作品。〈trace〉は直立させた一枚の紙片の上辺に火を点け、紙片が燃え切るまでの時間を長時間露光で撮影した写真作品となる。今回現場で制作した〈ephemeral〉は五年前に新宿で友人が経営する BAR の天井に描いて以来、二度目の制作となった。この作品は、紙に巻いた松脂を燃やすことで煤を発生させ、それを天井に当てながら描いていく。いわば煙で線を引く要領なのだが、上昇する煙は螺旋状に渦を巻くので定着する煤は放射状に広がり、なかなか思い通りに扱うことが難しい。会期の一ヶ月前から現場で作業させてもらえたのは大変ありがたかった。

多くの作品では制作中の燃焼作業が一回で終わらず、素材を重ねたり組み替えたりしながら何度も繰り返すことになるのだが、作業を重ねる内に燃焼の過程が「作る行為」に属

するのか「壊す行為」に属するのかが分からなくなってくる。燃やした素材を作品の一部として使っている以上、燃やすことも作る行為に属すると頭では理解していても、目の前で焼失していく素材は明らかに破壊されていて、そのまま放っておくと完全に炭化してしまう。当然だが、火が運動体（エネルギー）である以上、常に何かを消費しながら別の何かを生み出している。そこでは破壊と再生が同時に起きており、この同時性こそが作品にとって重要なのではないかと考え、作り始めたのが〈transitional stroke〉である。

〈transitional stroke〉ではバーナーを筆に持ち替え、「描く」と「消す」を交互に繰り返しながら制作している。水性ニスでコーティングしたパネルの上に油絵具や油性インクで線を引き、布で拭き取ることで消していく。一連の作業を何度も繰り返す内に、「描く」「消す」の認識は反転し、あるいは混ざり合い、一つのストロークが二つの意味を持ち始める。この作品で試みているのは、画面内のストロークをどっちつかずな状態として作り出すことである。どちらかに振れることなく「描く」と「消す」が同じ強度で存在しているとすれば、常に二つの視点を揺れ動くような絵画が作れるかもしれない。

さらに、〈transtructure〉と〈transitional stroke〉に限っては、展覧会で見せているのは「仮設」の状態であるという意識がある。この二作品は「燃やす / 組み立てる（もしくは描く / 消す）行為を繰り返す」という性質上、いつまでも制作を継続することが可能である。実際、〈transtructure〉の大型作品は会期が終わるとパーツ毎にばらし、次の展示では全く異なる形で組み直される。〈transitional stroke〉も必要があれば画面を消し、新たに線を引き直す。もちろん手元から離れた作品や、更新の必要を感じない作品はそのままの形で残しているが、常に「更新される可能性がある」ことが、これらの作品にとっては大切な要素なのではないかと感じている。

「どっちつかず」や「未完成」という言葉は、どちらかと言えばネガティブな印象を持たれやすい。私自身も我ながら優柔不断だとよく思う。コンセプトを聞かれた途端、歯切れが悪くなったりもする。しかし、だからこそ「立ち止まって問い直す」ことも比較的容易にできるのではないだろうか。どっちつかずでいることが、試行錯誤を許容する余地を残すことに繋がるのだとすれば、居心地が悪くともどまり続ける必要はあるのだと思う。

田中真吾







